

第 65 回岩手県水産審議会 会議録

日時 令和8年2月12日(木) 15:00~16:30

場所 岩手産業文化センター 第4会議室

開会・成立確認

鈴木
特命課長
(進行)

定刻となりましたので、ただ今から、第65回岩手県水産審議会を開催いたします。事務局を担当しております、農林水産部水産振興課特命課長の鈴木でございます。暫時、司会を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。
委員の皆様には、御多忙のところ御出席をいただき、誠にありがとうございます。本日は、委員19名のうち12名の御出席をいただいております。
半数以上の委員に御出席をいただきましたことから、岩手県附属機関条例第6条第2項の規定により、会議が成立しておりますことを、御報告いたします。
それでは、開会にあたりまして、岩手県農林水産部長の佐藤 法之より、御挨拶を申し上げます。

挨拶

佐藤
農林水産部長

農林水産部長の佐藤です。
まずもって、新たに委員に就任いただいた、岩手県町村会の佐藤副会長様、よろしくお願いいたします。
委員の皆様には、大変お忙しい中、岩手県水産審議会に御出席をいただき、ありがとうございます。また、日頃から、本県水産業の振興に、御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。
本県水産業を取り巻く環境は、秋サケなど主要魚種の極端な不漁や貝毒の長期化など、厳しい状況が続いていますが、昨年は、サンマの水揚げが増加し、ウニ漁では、漁獲量、漁獲高とも前年対比で約50%増となっております、明るい話題も見られたところです。
また、「水産業リポーン宣言」に基づく取組を積極的に進める中で、ウニの蓄養・出荷は16地区に拡大し、サーモン養殖は、今年度の生産実績が約3,300トン、来年度は約4,000トンの生産が計画されていまして、取組が着実に広がっています。
こうした取組を加速させるため、昨年1月に設立した「いわて水産連携推進会議」において、生産から加工・流通分野まで一体となった取組を推進していまして、
来年度当初予算案には、養殖サーモンについて、県外にPRするためのキャッチフレーズやロゴマークの作成や自動給餌機などの導入といったソフト・ハード両面からの支援や、ニーズの高い藻場再生は、前年度比で4割増となる約5億円、海業は、教育旅行や企業研修を見据えたガイドブック作成などの経費を盛り込んでいます。
本日の審議会では、第3期水面漁業振興計画案、令和8年度水産関係予算案などについて、御説明をさせていただきます。限られた時間ではありますが、忌憚のない御意見・御提言をいただきますようお願い申し上げます、開会の御挨拶とさせていただきます。
本日はよろしくお願いいたします。

報告 第3期水面漁業振興計画(案)について
黒潮大蛇行による海洋環境の変化とその影響
令和8年度水産関係予算(案)について
令和8年度水産関係予算(案)について

山崎 義広
委員(会長)

それでは、議事を進めさせていただきます。
今後の議事の進め方ですが、議題に関する資料1から資料4までの説明が全て終了し

	<p>た後、委員から御質問等をいただく流れとしたいと思います。</p> <p>それでは、議題（１）の、資料１の「第３期内水面漁業振興計画（案）について」、資料２の「黒潮大蛇行による海洋環境の変化とその影響」、資料３の「令和８年度水産関係予算（案）について」、資料４の「県産養殖サーモンのPRについて」の順に、事務局から説明をお願いします。</p>
藤原 振興担当課長	（資料１を説明）
太田 水産技術センター所長	（資料２を説明）
筒井 技術参事兼水産振興課総括課長 工藤 技術参事兼漁港漁村課総括課長	（資料３を説明）
藤原 振興担当課長	（資料４を説明）
山崎 義広 委員（会長）	<p>ただ今、事務局から説明がありましたが、ここからは議題（２）の意見交換とさせていただきます。</p> <p>資料１から資料４までについての質疑・意見、或いは、せっかくの機会ですので、出席委員の皆様から、それぞれのお立場でコメントをいただきたいと思います。</p> <p>なお、ご質問については、会場の都合により、おひとり２分程度を目安としてご発言くださいますようお願いいたします。何名かに分けてコメントをいただいた後に、事務局から回答させていただきます。</p> <p>それでは、及川委員から佐井委員まで席順にお願いしたいと思います。</p>
及川 忍 委員	<p>ホタテガイの養殖をしていますが、説明にあった貝毒の簡易検査キットについて、ホタテガイに限らずアサリやムール貝においても貝毒検査は必要であるため、検査にかかる費用負担等は漁業者にとって大きいものですので、実装はできれば早く進めていただきたいと思います。</p> <p>海洋環境の激変に対応すべく青年漁業者も頑張っているところですが、その中で区画漁業権の更新期間が５年となっており、新規養殖種を導入する場合５年も待つと経営が成り立たなくなってしまうため、できれば撤廃を検討してもらうなど、新規参入者へのハードルを下げていただきたいという要望が、各地から挙がっています。例えば、更新はこれまでどおり行う一方で、特例として認めるなど、早急に検討していただきたいと思います。</p> <p>また、漁業者交流大会がコロナ禍以降開催されていませんが、様々な漁業者と意見交換を行う機会がなくなってしまい心苦しいです。再開について検討していただきたいと思います。</p>
小野寺 真由美 委員	<p>学校給食の献立を考えています。給食では、１１月１１日をサケの日としてサケのメニューを提供しています。岩手県のサケ水揚量は現在全国何位なのか、こうした情報はどこ</p>

桑野 直彦 委員	<p>で参照できるのかを教えてください。</p> <p>秋サケは不漁ということなので、県産養殖サーモンを11月のサケの日にPRしてみようと思いますが、養殖サーモンは年中使えるものなのか教えてください。</p> <p>海の環境が大きく変わっていく中、研究開発を通じた支援といった中長期的な対応に加え、養殖サーモンに力を入れていくといった計画等については、足元の現状を踏まえた正当性のある取組だと思えます。</p> <p>昨年の審議会で、水産業振興には漁村の活性化が不可欠である旨お話ししました。その点について、次年度当初予算にしっかり盛り込んでいただいております。</p>
佐井 守 委員	<p>内水面漁協の立場から質問・提案させていただきます。</p> <p>「岩手県内水面漁業振興計画（第3期）最終案」について、1ページ中ほどに内水面組合の組合員数が約7割減少した旨記載されていますが、今は8割程度減少しているところですが、組合員の減少も深刻ですが、6ページ目の内水面漁業生産量における平成17年以降の急減は異常だと考えています。振興計画は平成28年から9年目となり来年見直すということですが、この点については見直しがなされていないため、漁業に限らず県全体で解析が必要ではないでしょうか。</p> <p>3ページ目の多自然河川づくりの推進について、アユだけでなく生物全般が減少しています。原因は外来種、カワウ、自然災害等、色々挙がっていますが、他の漁協との共通認識として、最も川の環境変化が著しいのは、自然災害そのものではなく、その後の復旧工事の影響だと考えています。県の土木等と連携しながら漁業振興に取り組んでいただきたいと思えます。</p> <p>また、5ページ目の各種モニタリング調査について、どのような形で行われ、どのように反映されているのか教えてください。</p>
山崎 義広 委員（会長）	<p>ただいま、委員から出された御意見等につきまして、事務局からコメントがありましたら簡潔にお願いします。</p>
藤原 振興担当課長	<p>及川委員からの御発言のあった貝毒簡易検査キットについて回答します。当該検査は、マウスを用いる公定法ほどの精度ではないものの、一定量以上の毒量であれば検出できるというものです。貝毒が検出されることが明らかな時期にこうしたキットを使用すると、マウスの検査よりも安価であるため、費用負担軽減につながります。当該検査キットは国で開発され、西日本の一部の県で導入事例があるため、本県での活用の可能性について今年から検討する予定としています。</p> <p>当面はホタテガイで実証しますが、他の種についても検証していきます。貝毒対策はすぐに成果が出るテーマではなく、対症療法的な対応とはなりますが、漁業者の負担を減らす取組として進めていきますので、見守っていただければと思います。</p>
野澤 漁業調整課長	<p>漁業権の存続期間は漁業法第75条で定められており、法定事項であるため期限をなくす、変えるというのは難しいところです。一方で、海洋環境変化による漁場変化等への対応として、試験養殖により生産性・収益性を確認し、有効と判断されれば次の切り替えで反映させる等の対応は可能であるため、要望があれば最寄りの水産部へ御相談いただければと思います。</p>
藤原 振興担当課長	<p>小野寺委員からの御発言のあった本県のサケの順位については、今年は青森県に負けて全国3位となっています。11月11日のサケの日は、サケの遡上時期ということで設定されたものになります。養殖サーモンの出荷時期は、調整は可能であるものの概ね6～7月です。PRの仕方については、今後、検討させていただきたいと思えます。</p> <p>佐井委員から御発言のあった内水面計画について回答します。資料6ページの平成17年からの内水面漁業生産量の落ち込みは統計の取り方が変わったことによるものであり、本来並列して表示するものではないのですが、直下の表との関係で表記させていた</p>

<p>山崎 義広 委員 (会長) 佐々木 淳 委員</p>	<p>だいているものです。平成17年までは種苗の生産量が含まれているため、見かけ上減少しているように見えるものです。</p> <p>漁協の経営、組合員数の減少についても大きな課題と認識しています。漁業権の切り替えの際に各漁協から意見聴取をしましたが、遊漁者は確保できているが組合員が集まらない、という意見もいただいています。組合員でいることのメリットについては組合ごとに事情があるため、県もアイデアを出しながら対応していきたいと考えています。</p> <p>モニタリングについては、河川管理者が実施するものもありますが、県としてはアユの遡上状況モニタリング調査を実施し、種苗生産等に活用しています。他にも、収集したデータは施策に役立てていきます。</p> <p>次に、佐々木委員から椎屋委員まで席順にお願いしたいと思います。</p> <p>先週開催された復興委員会において、知事の前で水産業の観点からコメントした内容と同様のコメントを申し上げます。</p> <p>昨年、広島県瀬戸内海沿岸でマガキの大量へい死が発生した際、国から早急な支援があったと聞いています。本県の養殖ではホタテガイの大量へい死が発生から3年目になりますが、国から何の支援策も示されていないことが残念です。へい死状況は広島県と同じく8～9割に上っています。岩手県での生産者・生産数量が少ないからか、或いは国への働きかけが足りないせいかもしれませんが、このままでは廃業者も出てくる可能性があるため、国への働きかけをお願いしたいです。</p> <p>去年の夏に黒潮大蛇行は終息しましたが、まだ見通しは立っていません。漁業者にとっては、水深10、20mの水温が作業に直接影響してくるため、リアルタイムの情報が必要となります。こうした施設の設置についても、検討いただきたいと思います。</p>
<p>佐藤 信逸 委員</p>	<p>不確実な要因が多い海を相手に、難しい問題を抱えながらの県の努力に感謝申し上げます。</p> <p>内水面漁業については単協でやっており、生産量が多くないため、大企業とは餌料購入費等の負担が違います。トラウトサーモン、ニジマスの稚魚の手配についても、今後どうするのか検討していただきたいと思います。養殖サーモンについては、各地区で異なるものを行っている中で、統一ブランド化に取り組んでいることを評価します。</p> <p>釜石で養殖しているサクラマスについて、ギンザケと比べて値段はどうか教えてください。また、カキやホタテガイの卵巣肥大症対策についての今後の見通しはどうか、ザラボヤ対策の見通しはどうか、ホタテガイ養殖に対する本県の見通しはどうかについても伺います。</p> <p>漁協の収入は定置漁業に依存していますが、補償制度であり生命維持装置でもある積立ぶらすの今後の見通しはどうか教えてください。</p>
<p>椎屋 百代 委員</p>	<p>地元でスーパーを経営していますので、小売業の立場からコメントします。店舗ではオランダ島サーモンはもちろん、大槌サーモンや陸前高田のギンザケを販売していますが、購入者の意識としては少し高いというイメージがあるようです。まだ漁獲量も安定していないため、どんどん推し進めていただき、地元の皆さまにも当たり前のように食べていただければよいと思います。</p> <p>また、担い手不足については、小売業にも共通の課題です。アカデミー支援事業もありますが、もっと踏み込んだ漁業者支援を進めていただきたいと思います。</p>
<p>山崎 義広 委員 (会長)</p>	<p>ただいま、委員から出された御意見等につきまして、事務局からコメントがありましたらお願いします。</p>
<p>藤原 振興担当課長</p>	<p>佐々木委員からの御発言のあったホタテガイ支援策について、マガキについては広島県における大量へい死発生をきっかけに国から支援パッケージが示されました。本県についてもマガキを対象とした調査は実施しましたが、マガキに比べホタテガイの方が厳しい状況となっています。成育温度帯から考えても、ホタテガイやコンブ等は水温20℃</p>

を超えると思われ、厳しい生き物であり、急激な環境変化があると影響が大きくなります。対応としては、水産技術センターや各水産部において養殖技術に関する試験研究を実施しており、技術面の支援を行っているほか、収入減対策としては積立ふらすや漁業共済制度による減収補填があります。また、今回の当初予算では、ホタテガイの生産量の回復が厳しい場合、短期間で収入源となるワカメへの転換支援も計上しています。やれることは漁業地域ごとに異なるので、相談しながら進めていきたいと考えています。

佐藤委員からの御発言のあった養殖サーモンの関係については、生産量が拡大していく中で稚魚の手配が最大の課題です。サケのふ化場が遊休化していることを踏まえて、県と増殖協会で協力し、サケふ化場を養殖サーモンの種苗生産に活用できるよう、国と協議の上補助事業上の整理を行ったところであり、現在 18 ふ化場のうち 11 ふ化場において種苗生産が可能となっています。今後も技術開発を進めていきたいです。

ブランド化についても当初予算に計上しています。既に各地区でブランド化を進めている中、岩手のサーモンであることを PR するため、関係者、養殖生産者からの意見に基づき共通のキャッチフレーズやロゴマークを作成することとしました。

卵巣肥大症については、対策として三倍体種苗の活用により軽減する取組を進めています。

椎屋委員から御発言のあった地元で食べられるサーモンについては、生産量は増加したものの地元で原料が届かず、まだ価格は高いままという御指摘をいただきました。毎年千トン規模で生産が増える中、地元での PR も進めていきたいと考えています。

野澤
漁業調整課長

佐藤委員から御発言のあったクロマグロの下げ止め措置については、当初水産庁からは廃止の方針が示されていましたが、県漁連をはじめ関係団体から要望を受けた経緯もあり、県から国へ廃止しないでほしい旨要望してきたところです。その結果、令和 7 年度から 5 か年にわたり段階的に廃止するという事で、ソフトランディングする形となりました。減収補填については、国に対しては共済制度、漁業収入安定対策事業の堅持を何度も強く要望してきました。ホタテガイに限らず、漁獲減少に伴う減収補填対策として、予算確保、事業堅持を要望していきたいと考えています。

椎屋委員から御発言のあった担い手確保・育成対策としては、水産アカデミーを中心に取り組んでおります。毎年 10 人を目標として受講生を募集しており、一定数応募をいただいているところです。今年度は修了生同士の交流が重要であるという観点から、修了生同士のネットワークづくりや人的交流構築に取り組みました。研修生から修了生まで一貫してフォローアップしていきたいと考えています。

太田
水産技術センター所長

佐藤委員から御発言のあったザラボヤについては、現在既に大量付着を確認していますが、養殖施設への付着を防止する薬剤等の活用などの対応は難しい状況となっています。水産技術センターでは、三陸やまだ漁協と連携し、山田湾内にモニタリングポイントを設け、毎月付着状況を調査しています。付着の傾向や条件が明らかになれば、付着を低減する垂下のタイミングや深度について今後提案できるのではないかと考えています。

ホタテガイについては、稚貝・成貝のへい死が多い状況でしたが、年末以降、昨年に比べれば水温が下がってきているため、動向を注視しているところです。ただし、津軽暖流の勢力が強いこと、親潮の差し込みが弱いこと、陸奥湾でのホタテガイ生残率の低下が見られている状況を受けて、陸奥湾を供給源とするラーバの来遊量が少なくなることを危惧しています。今後、普及員が実施するラーバ調査や付着稚貝調査の結果を踏まえて対策を検討していく見込みです。

山崎 義広
委員 (会長)
清水 勇吾
委員

次に、清水委員から藤岡委員まで席順にお願いしたいと思います。

黒潮大蛇行終息について、サバが底曳網で獲れなかった原因として思い当たるものはあるのか、また、定置網も昨年は振るわなかったが、その原因は何か教えてください。

また、テナガダラが底曳網で獲れているということですが、利用に関する研究開発は行っているのか教えてください。

中村 靖子
委員

産直運動を大切に活動しております。県内 24 の産地・農家と産直提携を行い、地域の組合員が収穫体験を行う等、生産者と交流することで生産者のこだわりや苦労をお聞きし、魅力を知って商品のファンになり、利用の拡大を図るといった活動を続けています。物価高騰により少しでも安いものを購入したいという気持ちもありますが、商品の価値を知っているからこそ購買意欲が湧いてくるというのが消費者として正直なところです。県産養殖サーモンを利用していただくことを考えた際に、生産者と消費者が交流する場が増えると嬉しいです。PR する場においても、生産者の顔が見える動画やパネルを使用するなど、こだわりや苦労が伝わるような売り場作りを工夫していただければ、もっとファンが増えるのではないかと思います。

養殖サーモンの新たなロゴマークを作成するということでしたが、昨年使っていたわんこきょうだいのマークとは異なるものか教えてください。

濱田 武士
委員

質問については他の委員からいただきましたので、総論的なことを申し上げます。

現在の漁獲量の激減について歴史を紐解くと、昭和 20 年代はサケが獲れず、今のようにマグロやブリが多く獲れる大謀網が主体でしたが、30～40 年代のサケふ化放流事業拡大に伴いサケの漁業が盛んになりました。冬場は他漁業がないということでワカメ養殖が拡大し、それまではカキやホヤ養殖くらいだったものがワカメの主産地を形成することとなりました。

その後ホタテやコンブが入り漁場利用が多様化し、漁港整備もワカメ養殖への対応を中心に進んできました。その後平成に入ると、回帰が良好だったのか環境要因かは不明ですがサケの漁獲量が 7 万トンを超え、その後は徐々に減少し、獲れなくなりました。高水温下において現状から脱却するためサーモン養殖に取り組んで、その生産量が伸びてきました。

こうした転換は昔からあり、養殖の方が確実性が高いということで、サーモン養殖だけではなくその他の種目についても検討していただきたいと思います。漁業権は 5 年ごとの更新ですが、5 年後を見据えた漁場利用のビジョンを描き、どのような養殖ができるかを県として考えていただきたい。サーモン養殖については生産が拡大していく中で今後どうするのか、これまでの体制では追いつかなくなる恐れがあります。種苗生産や漁場拡大、加工業界の受入能力などサプライチェーンに関わるあらゆる部分が足りなくなることが想定されます。将来的にどこまで生産量を伸ばすのか、海外からの発眼卵輸入に頼っている種苗確保について規制が厳しくなる中どう対応するのか、産業の各セクションのビジョンをどうするのか考える必要があります。基本的にサーモン養殖は現在拡大志向ですので、足りなくなったときどうするのか、県全体の産業インフラとして、静穏域を拡大させるなど、サケに変わる種目として伸ばしていくのか否かを検討する必要があります。

同時に、現存する定置漁業をどうするのか、集約して経営を再建する等、産業の立て方・戦略を考えていただきたいと思います。

藤岡 裕子
委員

まちづくりや広報、PR を専門としている観点から意見します。

PR に関しては、生産量が上がり県内向けから県外向けへフェーズが移行するというのは理解しますが、消費拡大や知名度向上については成果が測りにくい取組のため、継続して取り組んでほしいと思います。その中で、生産者と消費者が直接触れ合える機会が PR のヒントや活力になると考えます。そうした取組を進めるためには県の協力が必要となるため、難しさもあると思いますが、対面での PR 活動を進めていただきたいと思います。

私は道の駅もりおか浜民に勤務しており、そこで姫神サーモンや盛岡サーモンの存在を知りました。海面養殖ではないので、県産養殖サーモンとは異なるのかも知れませんが、道の駅では地物の魚メニューはとても喜ばれ、「魚メニューはないのか」という問い合わせもいただきます。安定供給が課題であり、気候変動のみならず様々な要因が関わるとは思いますが、生産者の皆さまが真っ直ぐ生産に取り組めるよう応援していきたいと思っています。

山崎 義広 委員 (会長)	<p>ただいま、委員から出された御意見等につきまして、事務局からコメントがありましたらお願いします。</p>
太田 水産技術セン ター所長	<p>清水委員からの御質問について、底曳網でのサバの不振については水産技術センターとして把握できていません。ただ、黒潮大蛇行の影響で底曳網の漁場に暖水が押し寄せ、漁場にサバ類が分布していた可能性が考えられます。国の資源評価では、サバ類の資源状況が悪く、旋網でも獲れていないということであるため、資源状況の影響もあると考えています。</p> <p>定置網については、これまで4万トン前後で推移していたものが令和7年に大きく減少していますが、近年の主力であるマイワシが獲れなかったのが一因と考えています。銚子沖付近では大漁だったということであり、資源量自体はそれなりにあるようですが、本県沖への来遊量が少なかったのではないかと考えています。</p> <p>テナガダラの利用については、歩留まりが悪く足が早いものの、上品なすり身になるということで、すり身原料として期待しています。水産技術センターでは利用加工部を中心として、宮城県のすり身加工業者と地元沖合底曳網漁業者の意見交換を行ったり、加工方法について調査や研究に取り組んでいます。</p>
筒井 技術参事兼水 産振興課総括 課長	<p>濱田委員からの御意見について、本県の定置漁業はかつてブリ定置だったものがサケ定置に変わり、そのサケも減少している状況となっています。これがレジームシフトによる周期的な変化だとすれば、長く続いた不漁が底を打って今後よい方向に変わるという希望的観測もありますが、一方で、温暖化傾向が続く中で水温上昇に対応するための短期的な対応として、来年度予算の中で高水温耐性を有するワカメ種苗やサクラマス種苗の開発や、高水温に強いとされるアサリ養殖への転換支援に取り組む予定としています。もう少し長期的な視点では、次年度の次期アクションプラン作成時に整理していくことになると思いますが、当該審議会の中で検討していくこととなりますので、引き続き御意見をいただければと思います。</p> <p>サーモン養殖については、委員御指摘のとおり、餌の問題、種苗、PR等が課題となりますので、サーモン養殖に関わる連携要素について意見交換を行いながら進めていきたいと考えています。</p>
藤原 振興担当課長	<p>中村委員から御質問のあったロゴマークについて、今回予算として計上しているロゴマークは、専門家の意見も踏まえて、本県養殖サーモンの特徴などを考慮して新たに作成するものになります。</p> <p>藤岡委員からの御質問のあった養殖サーモンについては、全国で200近くのブランドがあり、今回の対象はその中でも圧倒的に数量が多い海面養殖サーモンのブランド化を進めようとするものです。内水面の養殖サーモンのPRについても改めて検討したいと思います。</p> <p>対面でのPRについては、今年度も県産養殖サーモンについて話し合う場を設けてきましたが、次年度もしっかり検討していきたいと考えています。その中で、生産者から御意見をいただきながら取組を進めていきたいと考えています。</p>
山崎 義広 委員 (会長)	<p>各委員からのコメントに対する回答がされましたが、その他、委員の皆様から、何かございますでしょうか。</p> <p>それでは、他に発言がないようですので、最後に私の方から報告とお願いを申し上げます。</p> <p>海洋環境の変化による主要魚種の不漁など厳しい状況が続くなか、官民一丸となって「水産業リボン宣言」による取り組みが進められています。今後の更なる発展に向けて取組を加速させていただきますので、皆さまの一層のご理解とご協力をお願いいたします。</p>
鈴木 特命課長	<p>山崎会長、ありがとうございました。最後に、岩手県農林水産部水産担当技監の森山拓也より、委員の皆様へ、一言御礼の挨拶を述べさせていただきます。</p>

(進行)

閉会挨拶

森山
水産担当技監

閉会にあたりまして、山崎会長はじめ委員の皆さまには、本県水産業に関する貴重な御意見をいただき感謝申し上げます。
県としては、引き続き水産業の振興に関する取組を加速させるため、水産関係団体と一体となって取り組んでまいりますので、今後とも御支援をよろしくお願い申し上げます。

鈴木
特命課長
(進行)

これをもちまして、第65回岩手県水産審議会を閉会いたします。
本日は誠にありがとうございました。

閉会